The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本帝国植民地・台湾における原住民の文化支配 ：青年団政策を中心として
Author(s)	宋, 秀環
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42209
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【2】

氏　　名	宋（そう）　秀（しゅう）　環（かん）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　15662　号
学位授与年月日	平成12年7月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科日本学専攻
学　位　論　文　名	日本帝国植民地・台湾における原住民の文化支配 ――青年団政策を中心として――
論文審査委員	（主査） 教　授　川村　邦光 （副査） 教　授　中村　生雄　　教　授　杉原　　達　　助教授　冨山　一郎

論文内容の要旨

本論文は、台湾の日本統治時代における台湾総督府の青年団政策を通じた原住民の文化支配をめぐる人類学的研究である。序章では、研究史の整理を通じて、人類学的な台湾原住民研究と日本化政策に関する研究の視点を検討し、文化支配を分析する新たな視点が求められていることを課題として提示する。

第1章「日本の原住民統治概要」では、台湾原住民諸族の呼称、台湾総督府の全般的な台湾原住民の統治について述べるとともに、教育や「蕃人観光」、「青年劇」、博覧会などによる「理蕃政策」、また台湾原住民の支配の担い手である「理蕃警察」を取り上げて、台湾原住民に対する文化政策、その変遷を具体的に明らかにする。

第2章「台湾の官製青年団」では、台湾総督府は日本本土の青年団運動の成功を評価して、台湾に導入したプロセスを考察し、青年団を植民地支配の末端組織として編入し、文化支配の一翼の担い手として養成しようとしてきたことを実証的に明らかにする。

第3章「タイヤル族」では、植民地化以前を資料に、以後を聞き取り調査に基づいて、タイヤル族の社会組織の機能が青年団活動によって大きく変化していったことを論ずる。青年団活動を通じて、支配者側は社会の支配構造を変革して、リーダーシップを逆転させ、日本化政策を推進していった。タイヤル族の場合、年齢集団が存在しないため、青年を中核的な指導者として養成することは困難を予想させるが、蕃童教育所での教育、青年団での訓練を通じて「優秀青年」を育成して、支配者側の協力者とし、「蕃社改善」の成果をあげていった。

第4章「アミ族」でも、前章と同様の手法を用いて、アミ族において日本化政策がどのように推進されていったのかを論ずる。アミ族の場合は、タイヤル族とは異なり、厳格な年齢階層的秩序が存在し、日本の青年団を導入し受容しやすいと予想されたが、青年団会長が上位の年齢集団に対して影響力をもつことがなかったため、総督府警察の命令や伝達を実行させる権限がなく、青年団を通じた日本化政策は失敗し、社会のリーダーシップの逆転を図る青年団政策に対して抵抗が発生したことを指摘する。

第5章「綜合考察」では、これまで論じられてきたことを全体的にまとめ、植民地においては支配者側による文化政策の遂行が被支配者側においては従属的に受容されるのではなく、集団の個別的な状況に応じて積極的に受容されたり、拒絶され抵抗されたりすることがあることを指摘して、植民地における文化支配の問題を考察することの重要性を提起している。

論文審査の結果の要旨

植民地主義に関する研究は、歴史学や文化人類学などにおいて、近年盛んになり、多くの問題を提起している。本論文は歴史学の研究を踏まえた、フィールドワークを方法とする文化人類学的研究として位置づけることができる。

日本帝国・台湾総督府による、植民地台湾の支配は、一律に日本化・皇民化政策を武力を通じて強権的に遂行したのではなかった。本論文では、何よりも青年団の導入が重要な要因として論じられていることが大きな特徴であり、すぐれた視点である。その考察において、台湾原住民を一般化してしまうのではなく、各種族において異なっていたことを指摘して、事例としてタイヤル族とアミ族を対照的にあげて分析して論じた点は、本論文のもっともオリジナルなところである。植民地における文化支配を立体的に浮き彫りにすることができたといえるのである。このような多角的もしくは多元的な視点は、植民地主義研究を単なる支配と被支配、服従と抵抗といった二元的な視点を批判的に発展させる契機となると評価することができる。

これまでの歴史学による植民地研究を踏まえながら、『理蕃の友』などのような文献史料からは見出すことのできない植民地支配の記憶を現地でのフィールドワークを通じて掘り下げて明らかにしていることは、人類学的な植民地研究を新たに発展させたということができる。台湾原住民にとって、植民地支配がどのように体験されたのかを支配者側の文献だけに依拠して研究する方法には限界があることを示し、聞き取り調査を取り入れることによって被支配者側の多様な位置や対応を明らかにする研究方法を提示したのである。

とはいえ、若干の問題点も指摘できる。青年団の導入による原住民の文化支配がどのような歴史的プロセスを経て達成され、原住民自身の種族意識に対して「日本人」意識がどのような関係にあったのかという点について、聞き取りをさらに深めて考察することが、文化支配という中心論点から求められよう。そして、戦争・軍隊の体験がどのような記憶として語られ、脱植民地後、現在においてどのような意義をもっているのかについても、人類学的な植民地研究においては、重要なテーマとして設定されよう。本論文では、青年団の男性メンバーを中心にして、社会構造におけるリーダーシップの変化に関して論じられているが、女性メンバーにおいては日本化政策がどのように浸透して文化支配が行なわれたのか、あるいはどのような「旧慣」を維持していったのかについても調査して考案することが重要である。

しかし、これらの諸問題は、本論文の到達した成果を損なうものではなく、むしろ研究を深化させていく今後の課題として考えられるべきものである。よって、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容を有するものと認定する。